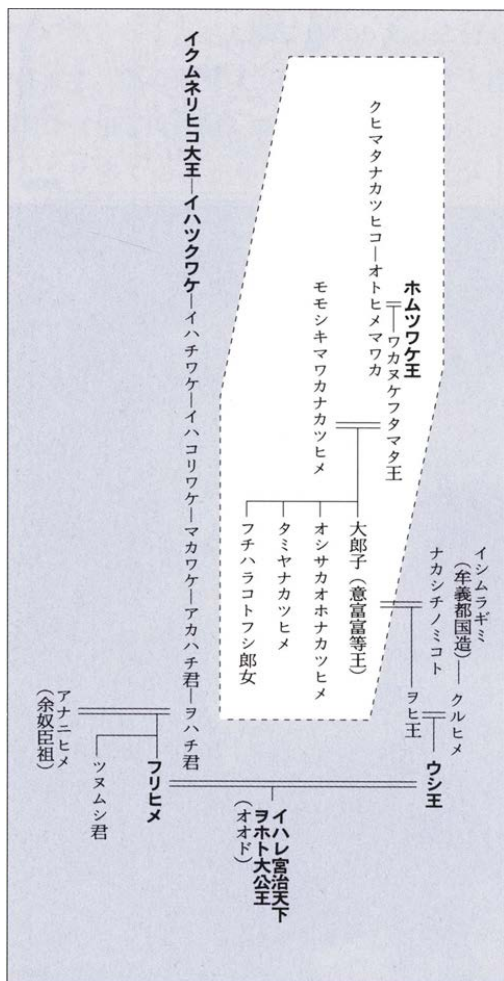


ツツキへ来た人々
(綴喜)

■ 筒城宮

迦迹米雷王の子孫一族や地域の人々をまき込んだ忍熊王の挙兵、そして敗北。その痛手がまだ残るこの地域に、6世紀の初



継体天皇の系譜 『上宮記』の記載より作製。
太字は『日本書紀』にみえる人名、点線内は息長氏の系譜
『福井県史』通史編

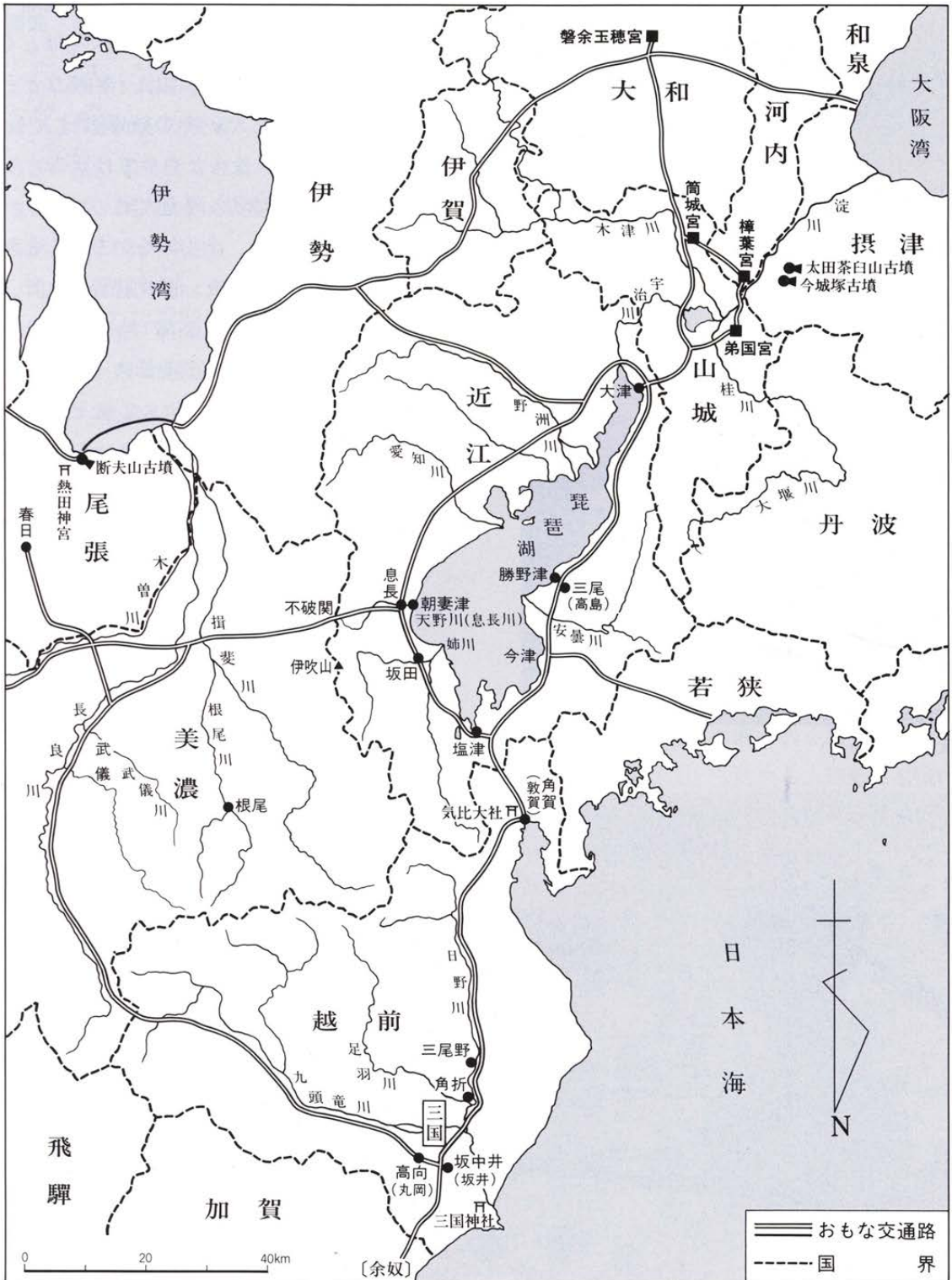
め、また緊張がみなぎりました。近江息長の首長の彦主人王の子で、母振媛の故郷の越前（福井県東部）で育った大迹王（後の継体天皇）が近畿に入り、樟葉（大阪府枚方市）に宮を構えたのです。地元の茨田の首長は、娘の関媛を大迹王の妃にいれました。大迹王の背後には、尾張・近江の琵琶湖西北および東岸の諸豪族がついており、琵琶湖・淀川の水軍、河内の騎馬隊も加わっていました。勢力からいっても、軍事力からいっても、倭国の政権とは比べようもなく強大で、恐ろしい大迹王でした。折しも、5世紀末に葛城国を統合したばかりの倭国の朝廷には、内紛が続いていました。

しかも大迹王は、宮を筒城に移してきました。息長氏は迦迹米雷王の子を祖としたので、その血をひく大迹王は、筒城に入ってきたのでしょうか。511年のことだったといいます。筒城宮の跡は、京田辺市普賢寺の字御所のあたりという説が有力です。

大迹王は、葛城勢力と合体した後の倭朝廷の動きをなお確かめようとしたのか、7年間を過ごした筒城宮をはなれて、淀川の北の弟国（乙訓）宮（長岡京市内）へ移っていきました。大迹王が、この後に倭朝廷に迎え入れられた（継体天皇）のは、526年のことでした。朝廷では、大伴・葛城氏らの旧勢力のほか物部・蘇我氏らの新勢力が台頭していました。

■ 下狛と相楽館

継体天皇以後の倭朝廷をヤマト朝廷と表現します。それは、従来の倭朝廷とは大き



継体天皇大和入国までの経路

古代 2

く変わってきたからです。

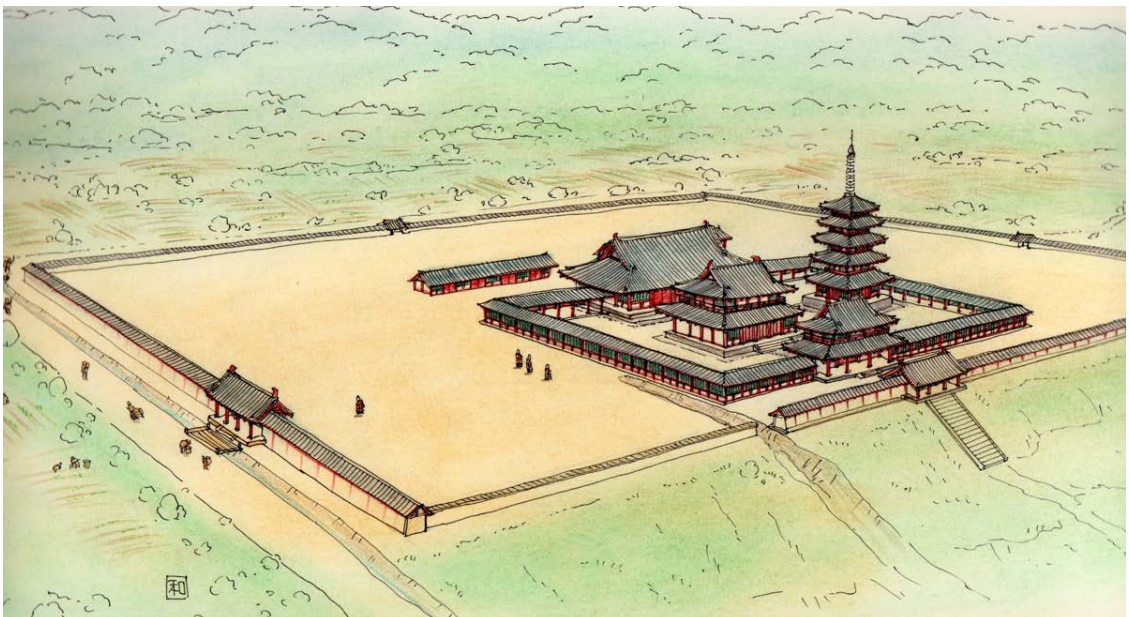
どう変わったか。がんに倭朝廷へ対抗する勢力の基盤であった南山城は、ヤマト朝廷の直接の支配下に入りました。これに乗じて、和珥氏はこの地域への影響を強めました。また、ヤマト朝廷は筑紫の首長磐井と戦ってうち破り、北九州を制圧しました。この後には、北陸や近江からだけでなく、筑紫を経てこの地域へ朝鮮半島北部の高句麗の人々が来るようになりました。



高麗寺跡（木津川市）

下狛や木津川市の上狛はその拠点の居住地でした。朝鮮半島からの渡来系の人々はとくにこの一帯に多くなり、狛人・狛部などとして編成されました。その統率者は大狛造として朝廷に仕え、やがては氏寺として、高麗寺（木津川市）も建てたのです。

こういう状況は、南山城をいちだんと外交上の要地にしました。6世紀後半には、ヤマト朝廷の相楽館（高械館）が設けられたのです。それは外国使節の一時の宿泊所であり役所でもありました。たとえば、570年に北陸に着いた高句麗使は、ここへ泊って翌々年に飛鳥の朝廷に入り、初めて高句麗との正式な外交を開きました。このとき、一行の王辰爾は、遭難や盗難に備えて鳥の羽に書かれていた国王の書を、湯気にあて帛に写して読み取りました。朝廷の役人たちは、外国役人の知恵や技術に驚いたことでした。



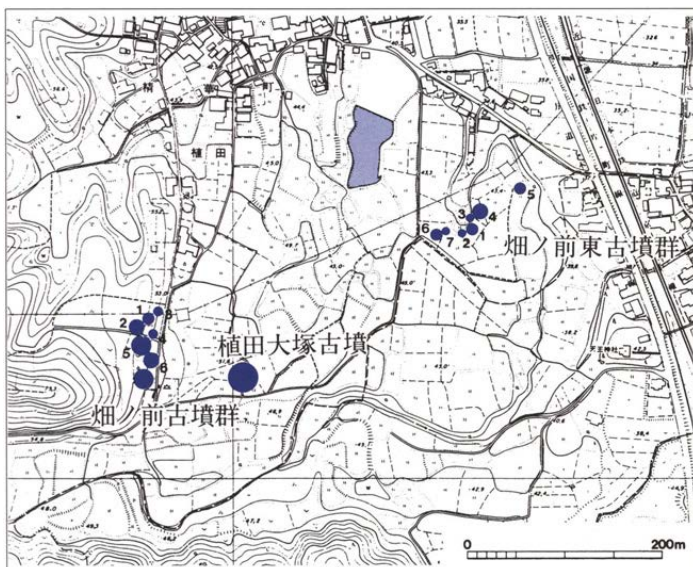
高麗寺イメージ図 木津川市教育委員会

■畑ノ前の古墳群と味蜂間 あはちま

ところで、南山城とくに古代の相楽郡における外国からの渡来人や渡来文化のことは、かなり知られています。しかし、この地域へは、国内の他の地域から来た渡来人もありました。

町内の植田の畑ノ前・畑ノ前東古墳群は、1985（昭和60）年と、1988～1989（昭和63～平成元）年に発掘調査されましたが、それぞれ7基の6世紀後半～7世紀前半の小古墳がみつかりました。新しいことがたくさんわかりましたが、とくに川原石を使った特異な横穴式石室が集中的に築かれていたことが注目されます。というのは、このような石室は、岐阜県南東部（美濃）の長良川～愛知県北西部（尾張）の木曾川流域に集中しています。そこは古代の美濃国安八郡です。

安八郡は古代に味蜂間郡とも書きました。



畑ノ前・畑ノ前東古墳群



川原石を使った横穴式石室 畑ノ前東1号墳

古代の宮廷に仕えた稲蜂間氏が本拠にしたのは、精華町の大字の北稲八間・南稲八妻です。美濃の味蜂間と精華町の（稲蜂間→）稲八間は、住民の葬制だけでなくこうした名称の共通性も確かめられます。精華

町は、古代から、海外にも国内の他地域にも、ひろい世界につながっていたのです。



馬形の釣手を飾る須恵器提瓶
畑ノ前東4号墳より出土